日用心法鈔三編

上

ロ9
1303
7

ロ仁9
1303
7

さ本ハ何事よりも先ハいのをゝ眞先へたゝ猫の尾をやゝ長くいの相談も出来がたしとゝいふ事をかきたる本也ハいと小さひぶふくてハ一日自遣りがたし。命もたゝ一ツ人間の交りも出来ずと是ふすゝ〻く飯米小さひの安く出来るも飯をかきたる本也。飯米小さの澤山ふゐしきと思ふ人ハかゝ〻ず業をえる爲〻

平かふ
殆入

日用心法鈔三編

上中下三冊

東都下谷金杯
天保十一歳八月　壽福軒述

壽福軒

自序

夫世間の人を見るに酒宴遊興居角力を好む人ハ澤山ふゐる家業を好んでつとむる人至て希也又ハ飯を澤山ふたべる人ハあれ共米穀を澤山ふ貯置くたべる人ハ至て希也唯ひとりふ用意もふゝ〻ふたべる人ハ至て希也常貪欲常飢饉ふ者てつまらぬ者也又金銀を多ふ人ハ澤山ふ借金ふ人ハ至て希也ふらゞ是非共ふ家を失ひ身をわるゞし。非人乞食とあらゝ孤ぢあらぬ事をよく

志川て。全很米穀を澤山に調へる事を專要とすべし。拙こゝを然の事ゝ年久し是よりして草紙を集む。行幸家業也精し。儉約を守り。全很米穀の澤山にある為うますべしゝと天下泰平國家安全の根本也拙是をこひ願ふのみ。無智をかへり見ず稿のぶす

たとへ草本ありとも。無學文盲にして。かゝる事ハ。大ひに恐る事ゝ。且又念佛の邪魔になるを。後編切に志ゝ。誡かゝ間鋪と思ひ。所に又家業ハ

げしく志ゝ。書をよむに隙ふき者也。三人寄川て。我等ハ存知ゝ通書をよむひまなし。志ゝとのゝて。書をよまざるゝ道ハ通りがたし。今其許のかゝゝ書を見ゝ。かるゝのやうに志て大ひに考へる事ゝ川て。身の爲家の爲に成川て。安心の場所へもむくやうに思ひ。何卒三篇も五へんも相認めゝ。ひまをかさねひ出をよ任せゝ志る者也。凡人の隙をかさねひ出を文字のゝやまり。詞のいやしきを。省む事。ふるを

日用心法鈔三編上　目録

一何事ふるまうずくいのこゝろ。真先つたりとらの事　四丁
一口といふこゝろい主人がひるとりの事　九丁
一戒中候徧の尾市かう右ゆくの事　十丁
一人ハくい物を以て樂ミの最上とする事　十二丁
一三年も五年も。他り盲目他りつんぢでも
居ゆうけまた。一日もたべずハ居られぬ事　十四丁
一天下の主ゞとふ川てもゆ飯をたべどもてハ役ハ立ぬ事
一家業ハ休むけまた。らの事ハ一食も休まぬ事　十七丁
一飯米小をひうふいと。夫婦けんらゆが起るとらの事　廿丁

一釋尊阿難に赤真珠を取る御説法の事　九一丁
一悪人に善き御政事を憎む事　九三丁
一家の興廃に奢と倹約とにある事　三十二丁
一昔しの聖人方におごりなる事　三十三丁
一天照大神宮ゑらぶきの宮に居ます事　三十五丁
一高き家の御製八雲立神詠の事　三十九丁
一井田の法十一の法四公六民の事　四十二丁
一くい物小をひゞふけまゝ民悪事をする事　四十五丁

宝生院蔵書

日用心法鈔三編上

前編ふもらに通り一すの孝合あり。嗜欲ゞ真先に立り。涉猟をたべず書ていたゞ面白しに出来がたし。祝儀不祝儀云ふ。くいのこゞ真先に立り。何ふ身てもくいのこのこゞあるとらふ事あし。

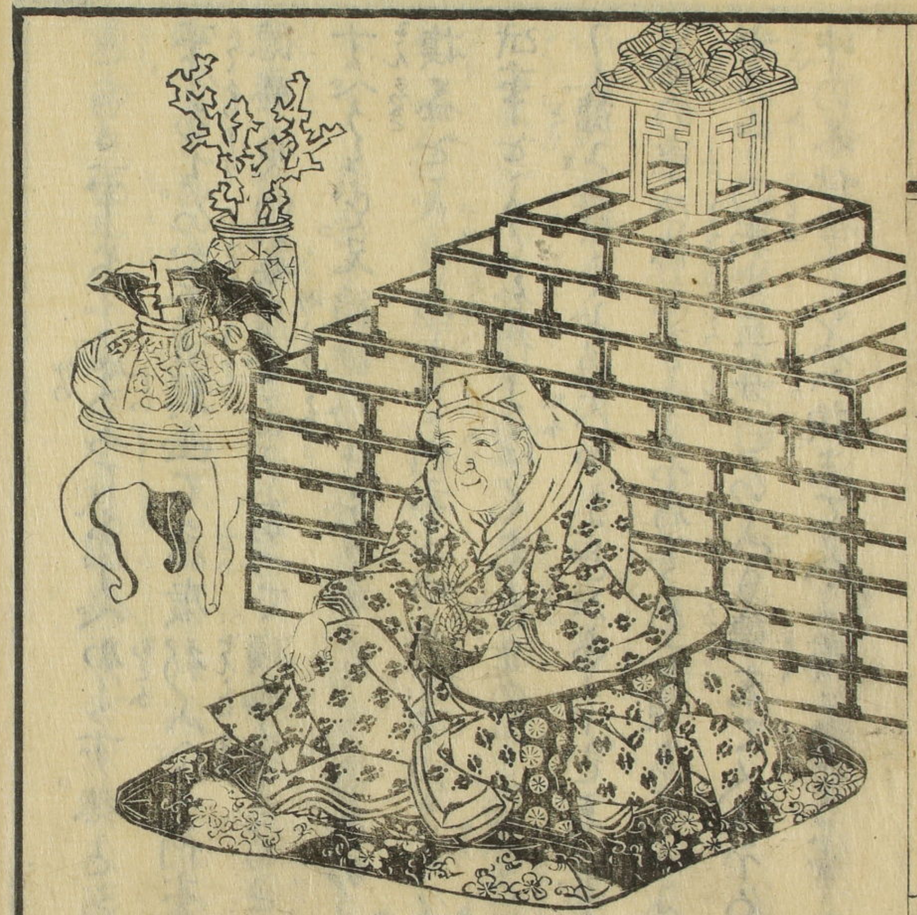
文も一日ふ一へんゝ三へんゝ面白よげきたゝ。ゆ賀もたべるかゝゝて。たまりがたし。くりていゝ又くいくりていゝ又くいくりていゝ又事むかりふかゝりている。猪茶と法ふ又座ふ書かける。くいのこゞ高書あり。かせぎするひまゝ面白し。高ひも耕作も出来がたし。ゝふ事むかりふかゝりて居る。米上にまるくゝゝる若あり。ふ不どきをつけ祝む氣い嫌ものふ。ぶべし。弄ふ

○勤てもつとめてもつとめてもつとめたらぬつとめありけり
けうこのかたをよく考へて。くいのこよりつとめ働く事を勝ゆう
ふすべし。大方の人がうふ事ふの隨分とおごりぜいたくてくふ
けきどもつとめむたらく事ふの精出す人至て希なり。又仕事
の明日へのむすんの人のきどもうふ事を明日へのむす人なし。うま
いものの貪ふくへとて夜としてうふ人の沢山ふのきども仕事を
夜としてする人なし。どふ考てもたべる事のおやく仕事のもく
なし。是では入豆と出る豆とが大違ひなきを。勤宝のなれ者な
り。大晦日の勤宝がのる祝を。家を矣ひ米をやろがすうりふなし。
さすがを一家一門の祝よごし。我米のえより毒ふけんぞく迷なん

ぎなんぞうするなり。此事を高殺考へて。人く家業を出精して。
米上をよく致すべし。皆人が苦労するいの方おやつまる所の米上
がるくなるかうの事也。米上がるくなるとかまを祝をそのの
ちうふ苦労する事いなきなり。考かるふ皆人が苦労もるいつまる
所の米上がるくなる方の事なり。米上がるくなるをを一家一
門の勿論知音近所の人ふも不義理なるべし。たとひ又不義理
なくた。貧米がをがんでなまりなよくいなるべかうずや事を
深くかんがへて。米をよく倍め家業を出精すべし。くいのを衣服
のおごりをむぶき。事く少く完なりとも。金銀の殘るをうふすべし。
事くのこるやうふせ祝が。不時の入用に防ぎがたし。不時の入用とふ

世ぐ用心あるべし。不覚と云事。疑ひあり。いやいかあるべ。遠く
陸くみ不時の入用を防ぐ用心なるべし
○換の道面白ともあさ手ゝ云て徳ひる事ハ。くるしくとせよ
山奇の心をよく考て。換の立事ハ貪すべからず。換い一切不自
由の本あり。貪欲あんぎの根本あり。甚一切災ひの本を好んで
行ふ人ハ。大馬鹿のて川へんあり。此事とよく考て。換の道い
面白く性あすべからず。換とゆふ字のもけとよく考まと。換の
立事ハせぬ者あり。益あき事ハ悪事ハ回箱あり。悪事ハ換
和貪欲あんぎの道あり。吾事ハ福徳安心のまを海るの
道あり。何事ふよくず。換徳勝負をよく考て。換とあり負

とある事ハ。変ゝ云てあすべかゝず。徳とあり勝とある
事あり。いやでも精出て急度行ふべし。何事ふよくず。損
徳勝負の義用をよく考て。損恥負とゝ云ゝ変云てふ
すべゝ。又福徳勝とある事ハ。急度ゆゝすべし。此二つの
損益をよく考て。何事ふよくず。ハの事ハ有べゝず。
此事をよく心得よ。深く考ると。世の中ハ損と負ハ恥の大恥ハふ
ゝ徳と勝ハ。どの大ハまを。ハふゝと考るべし。狂歌ふ
○世の中ハ徳云て入よ。ゆゝて。損云て人ふ若ハまを。けり
世の中の出世立身とゝ。徳云て人ふ。ゆゝる事也。世の
中の不仕合とゝふハ。損云て人ふ若ハまを事也。世の中の安心



金銀さへ沢山あるとき、
世をとかとても、ふとく
えつる不男でも、こゝ男
ゴえつる。ゆろくの金
うくつえんるときゝ大まる
とえつる。芸藝でも異
能でも、ちゝやゞいや
ゞ出入をさせてトコロ
とたのゞきゝうる金銀
の威光の大ひなる
りめあり

樂をとゝのゝ物の年〻金銀のふるゝほど樂をゝふゝ。威勢
もよくゝあり。人の用ひもよくゝあるとゝるべし
○孫ざゝもの德ひる道を思案せよ徒事ゝけゝてゝ子はじ
○若きより年終る迄の樂をゝ金とる道ゝゝくゝりのゝふゝ
ゝ哥の通り。何ゝ樂をとゝゝても。毎年金銀のふるゝ程の樂を
ゝふゝゝとゝるべし。金銀さへひまとゝば。芝居拍子花見月見詰碁立
花等の樂をも。ゝの侍也。又人の用ひもよくく。万事自由自在を
得るゝゝり。金銀ゝゝくゝて。ゝの事の樂をも出来ゝゝ。又家賃
くゝ物ゝ追まるゝゝゝゝて。花見も遊山も茶の湯立花等の樂
をゝ少しも出来ゝゝ。貪ゝ諸道の妨げ四百四病の煩ひゝる。貪やど

つゝき物ゝふゝしとゝゝゝ。談ゝてもよくゝゝるべし。金銀ゝふく
てゝ首のゝゝいゝりもゝとりゝゝり。そとゝゝるかともゝゝゝ人
ゝふゝし。皆きゝゝゝゝる人ゝかりゝゝり。又近身ゝもゝりゝゝし。
近身ゝゝゝゝゝ直ゝかりたゝる直ゝ無ゝゝひかけゝ係ゝる
さくゝて近奇ゝゝし。近奇ゝゝゝゝゝゝゝ人
ゝきゝゝゝゝる者。よき人と交りも出来ゝゝし。ゝゝゝゝの
て。何卒福人とゝりゝへたとひ藝能たりた無益の事ゝゝる
ゝゝぬゝゝよゝ。無益の事ゝゝせぬゝゝよゝ。歌ゝ
○身の爲ゝ益ゝる藝をよくゝゝゝゝ。辛苦ゝりた。ゝゝべきゝ也
○世を渡る道ゝ益ゝきゝ藝能ゝ面白くとも。ゝゝゝゝべかゝゝず

此二首の和歌をよく合点あるべしたとひ羹雜たり共身の為世の為ふかふる事をおもふべし。是人間のたしなみなり。何でもかでも序叙にたべずに居られぬうらまれて其用を急度後すべし。若此用をおこたる人は急病死の人なりと思ふべし盃の事は少しも多くのべかねず四も五もふいずしの空腹もこらへがたし。況や三日も四日もたべずに尚居りがたし。一回に三度の用てもたべねばかゝぬと考るべし。こゝをよく用て拵山おごり等を為めて昼夜怠ずにつとめたらくべし。人の為にもたらくべし。人のための働きなり。和歌に

○口とはふと云ふ主人がいる故に朝から晩までさてもせはしい。人の為に勤め働くように不皆我口端のことはいふ人に使はるゝなり。此主人に一日見えふさまると直に冥途の客となる。こゝを恐るしや。我序口様に美上る品物を急度用意すべし。世の中に恐るべき最上といふは序口様といふこと是いふ人に差上ぬのが序口様に美上ぬ。妖物ばかりこゝは。幽霊が恐るべきといふはけまたは後に人をこい殺したるこゝはしふし。此序口様に美上ぬが善くて昔から飢死者ハ数千方といふに数の者ばかり。別て天保八酉年抔毎日飢死する者殺し皆様方存知の通りなり。然らば此序口様に美上る物のふ

い程。恐ろしき事ハふきとゝろるべし。是をよくしてくい過の用意ハ急度法すべし。深くゑ得ゑへ

又親ゑつゝ子ゑ。子人ゑつゝ妻子けんぞくの為ゑつゝ子を
ると思ふべゝ。ゝず皆我ゑ儲の為のつとめをたゝきふり出ゑて
人ゑつゝゑると思ふべかゝず。皆我身の為のつとめふり。然ら
ば精出てつとめをゝいて大飯をたへて。何わゞも長命すべし。

夫れ勤め働く事ゞいやゑゝ序飯をたべゑゝ事ハ序ニ毒用ふり
ゑ段法兼知ゑゝゝば他者も世話ゑゝけず去て安ゑ也併し冥
途のたび立序用意ゑるべし。二日を待ず去て死ん事ハ定ゑ
りゝゝゝや恐ろしゝや冥途のたび立せんよりハ勤めをゝゝくべし

○松平越中守定信候ゝ勤役中御用ニ付ゝ上京のおりから。
草津の宿ゑゝ泊りゑり。その本陣の床の間ゑ自互縫ゑ袴
のかけてゑる繪を法後遊バさゝて其服書ゑ　以尾日ゑ三
度やいて民安全ゑり。焼ざる時ハ民くるゝむ。そゞりゑやき
る時ハ家をやろゞし。国を失ふ焼ざゝむ。交り落し。高き
家の御製も尾ゑ出たり。貴賤貧福ハ禍の尾ゑゝり御歌ゑ

○よきゑ似よ。あしきゑ。よるゑ。ゑべて世のゝのゝろハ自互縫也
貴賤貧福ハ禍の尾ゑゝりとハ。誰も考る者ゑし。ゑる越中ゑ
ハ上下の幸ゝをゝく法存知ゑて人情ゑ通しゝたる大智者ゑる
べし。貴賤貧福ゝゑ禍の尾をもゑゝて。一日も送りがたし。貴賤

上ゝたゝふ。一日ふ三度ハ是非たこよやか孫ぢゐゝぬ。禍の尻也。禍の尻をしゐまとてハ。道理も理屈も禮義も作法も遊山も色事も。見へも名聞も出來がゝとし。唯くいたいくぢりとある。唯くいたいのうたいよひうまとて。外の遊山樂をふをゝゐし。甚苦の事也。大千世界の宝ふもかへゝがゝき。大事の命也。甚一大事の命よかゝる事あまをゝ。寢ふ至てハ。機をりゝ心をくるゝ苦也。おごりもきいゝ風も。拵山も色事も。沢山よたべゝ上の事也。沢山よたべゝ上の事也。飯をたべずゝてハ。かゝりきり咄ハ出來がゝとし。甚苦事こハけりとうゐ道具でも。沢飯ゐゐハ時ふハちよこゝく。持出て沢山とゝてたべ孫がゐゝぬ先祖代ゝより伝りたる政宗の刀でも。古法眼ゐ三幅對でも。茶の湯の道具でも。

貪之ふゐ川てハ皆うりゐいふ世孫ぢゐゝぬ。こまハ唐ふも日本ふも。ゐい道具ぢ先祖孫よりのもづり物。身ふも家ふもかへぬ命寶。何でもかでも。大切ふ去て置孫ぢゐゝぬとゝ。ふけまゝ沢飯ゐゐゐゝぬ川てゐまで。賣て飯案と世孫ぢゐゝぬ。是ハ大切ゐ道具是ハ君よりゝ拜領物とゝ川てありがたし。皆貨ふやるゝ古道具ゐ。賣て仕上孫ぢゐゝぬ。ゐゝくても何でも仕方ゐ。

毒の毒ふ万ゐゝり。体の奇ふ

○一生のもゝり本そゝたゝぬまゝ。人ともふめゝと去るゐゝり。神仏ゐ何ゐどぢもゝりゐさまとてもゝ飯をたべずゝ去てハ。死するふ相違ゐ。仏神の所もゝりゐくゝたゝ沢飯さゝたべまゝ。死する事づひ

あり。扨うべ歩飯と云るハ。真炭延命のもとり本なるゆ遠ひあり。知恵切たる道理也。千年生る亀でも。万年生る亀でも。くい物がなけれ。若死せ仏ぢあらぬ。況や其外の短命なる者共ハ。尚更の事と云るべし。是ゆゑ川て見ぬ。くい物不どなるき物ハあり。更故ゆ花よりだんご。みやより牡丹餅。吉原へ行よりハ茶漬くふがよし。花見るよりハ一合飯でそだくふがよし。何でもいろけよりくいけとゆふ相違あり。唯ゆんとゆふても。歩飯と小麦ひゆあくてハ。首のあいよりもおとりあり。附来ひとさいあくても用ハ豆がゆ。況や飯米小麦ひゆあくてハ猶更の事と云るべし。川柳ゆ句ゆも。二ツ買よたらとやめてそだ二ツと云

しゆ。よたら買よりハそだくふがよいとゆふ也あり

○ひもじさとさむさと寒とくらぶ也ば祇しゆ。ひもじさこそまさ。

とゆふ事よてもよくさとるべし。歩飯をたべず居ても芝居も花見も月見も。全ゆ。芝居花見も。一盃のんでうまい物を。沢山ふたべてこそ。面白けれ。くらずのまずゆ見て居ても面白き事ゆ。花ばかり見。月ばかり見ていゆ。更く面白き事ゆ。一盃のうまい物を沢山ふたべてこそ。面白けれ。のまずくらずゆ。月見も花見も少しも面白き事ゆ。（此他者ハいや云ハ他者と云くいのうの事也かりの）

○くいのうゆ楽うの第一ゆり首し唐土より日本ハ何を以て楽を

の第一とするやと尋ね。事ゆり。其答ゆ。信者のゆふハ仁義

禮智信を行ふを以て。樂その第一とすといふ。又ある人がいふは芝居
拵山色情杯と色くふ俳儀するけもの。いげもど樂の最上といふ
事がおもしがたし。是を沢庵和尚よたげ祐〜ふ日本いくいあを以
て樂その第一とすと教へふこもよろて。日本いくいあ
を以て樂その第一とすと答へふとも。教へふこもよろて。日本いくいあ
事。是は是ふ相違あり。何の樂とといへども。くいあふもたる樂とは
あり。外くの樂をいくいあをたべる。上の事也。くいのをあり。ふ樂をい
出来がたし。おろかくいあい樂その最上ふあて其外の芝居拵山
色情等の樂をい未の未とあるべ〜
ほ飯を沢山ふたべてかゝ舌原ありた。芝居ありた。花見よありた

れ出あさも。〜いあがあくてい。何の事も面白き事あり。一すの奇
合祝儀不祝儀こん禮葬式がそく。吐ふ近くひのもが先立何
事ふもくいのをのむあもる事あり。人間い意地のきてあき
者あり。くつてい箱たも。くりていい箱たもろふと箱たもるとふ
かゝりて居る。箱たもるえもがあいとてなくせくと働き殺をか
ゝく人間ハ馬鹿あ者あり。一体の歌ふ
○世の中いかせいでくふて箱たもてさてそのちい死るむかりぞ。
と云奇の通りよ安〜も間違あり。夫も一日ふ一返ふ二へん
あるふけもも九五度も六度もたべるかゝあて。たまゝふあい徊釜
を洗ふ又垂ふ仕かけるふと箱たもるふかくりて居る。家業をつ

とむるひまなし。貪欲する筈なり。世の中にむかしより筈なり。
是からいのまりたべぬやうにしなくてもらいませう。左様にもある
まいからなくて。是からいのどをみいねをたべて家業をなほせい
だしてもらいませう。左もあくてい。常飢饉常貧乏常あんぎ
なり。是でいつまでもぬきなり。是ふうにして元日からなほせいに
かけて。大三十日の勤定のよく出来るやうにすべし。皆く筈と出
得ぬ。〇目に花を見ても口ぬが合長せず。とは発句をよく合長
すべし。目に花を見ても尊に浮世理小歌三絃を聞ても。序飯を
たべずにていろが合長せず。又くるとのまずに聞ていなりが
たし。なかなかべ。序口様ぶ西義知の上でなくていの事も出来

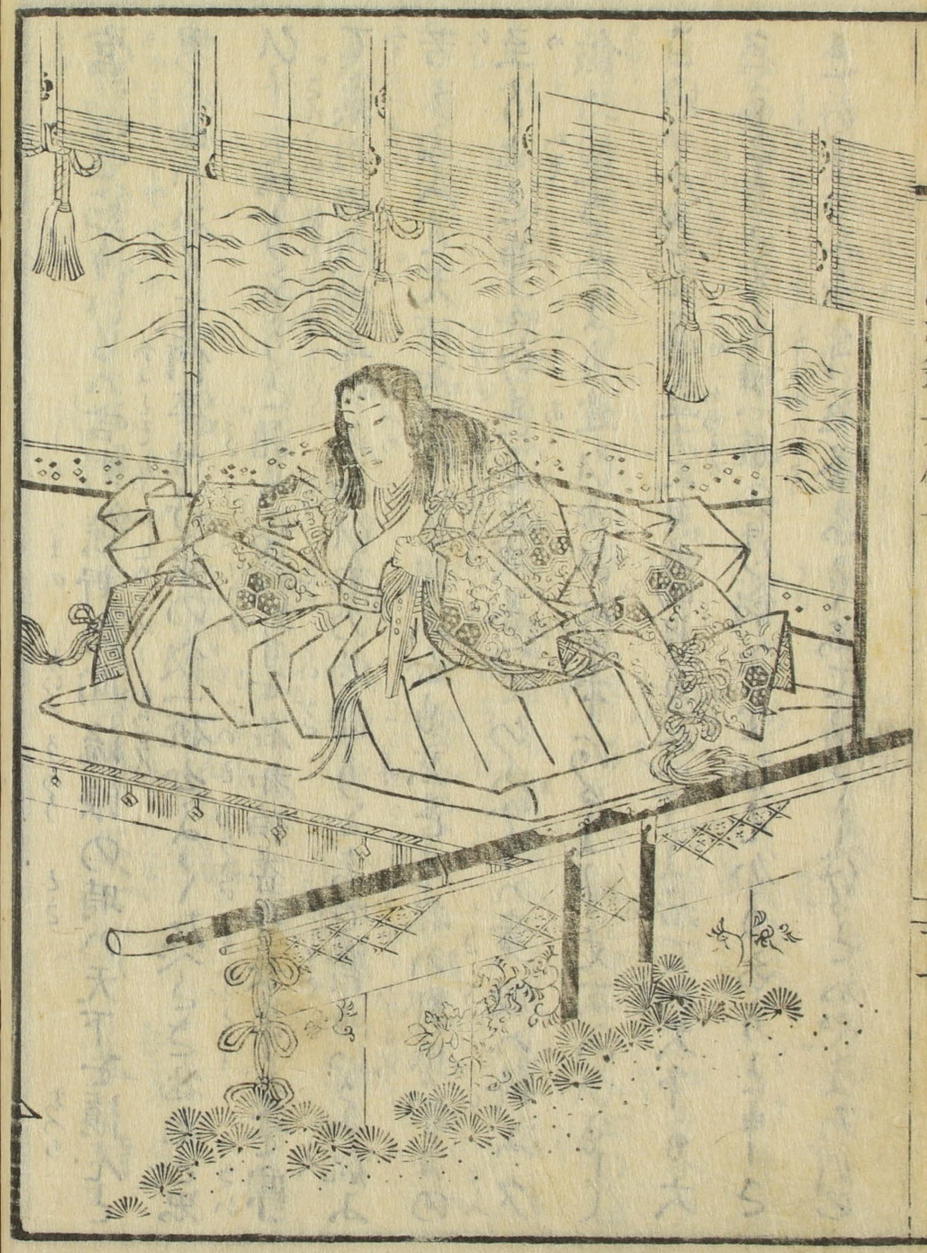
がたし。又目に花を見ずに。二年も三年も居やうけるに。一日
くるとずにをりがたし。耳も又年も七年もふさいで居やう
けるに。口に一日もふさいで居りがたし。三日くるとずに居るとだ
ぢきに冥途の幽霊となる。こゝや恐ろしや。序口様の合長なさる
やうにすべし。彼君子是をよく心得ぬ。是をよく心得ざる
人に大だとけ大臭たるなり。智者学匠といへども。飯米小麦ひ
のあいやうにあまりにて。愚者も同様なり。智愚ともにいとい
も。飯米小麦ひの沢山にいる事なり。ひつきやう
業文するも仁義道智信の道を行ひて清浄なる天孫を得て。
身分相応の飯米小麦ひのいる事なり。四の五のいへ

ども外ゝ子細あり。苦労をするも貴ばもつまる所ハ底なしの口を埋ぐ為なり。池いらず埋てもなかゝ院のいゝぱけなるとだ。人くゝ夜てハ墓ゞ穴ケ書きうめ物なり。池を埋るむかりふ。生使ひたをさるくなり。何ぞども貴ばて池を埋る工夫といとをべし。池を埋ずるゝおいてハ智者も智者ふわらず。学者も学者ふわらず。邪智邪学なり。吾智吾学でも飢死小生ひふ。先借らぬ人を。よい人とゆふべし。家身一分の役ハ相応ハ

○天下の主となり例ても。ゆ飯をたべすゝ者ハ楽をなし。ゑんぎゑん者ゝうなり其者ゝうこハ疑武御一統の後

大塔の宮吉野より熊野落ゝ給ひ諸将方衆を賀し奉る時。

宮仰せ給ひけるハ吉野熊野の間流浪の時ハ天下を慎んと思ふ。ふハふくて何卒唯今米の飯一椀ふよくたべさせ物也と思ひしをかりふりと。語りをひしを名和伯耆守長年是を聞て。桑内の後楠正成ふ向ひ右の物語りを者ゝ宮ゝいふ飢ふ苦ゝをゝふた。天下を慎んと思ふふも宮ゝ様ハ鄙賤子方の至り也と申ゝけゝ。正成答ゝてゝふ中ゝ貴殿ハ終ふ夕飯の遅きゝよりも違ひをひたる事ゝ迄ふひもし。このふんぎを者ゝらず。三日も四日もたべず居てハ。天下を大名も是をふし。唯一椀の今飯を至むをかりふりと申さゝけゝを。長年返答ふくまてもくしけるとかやゝ。ろ所也



大塔の宮建武
御一統の後吉野
より帰洛し奉
諸將万歳を賀
し奉る所

名和伯耆守

備正成

かんふんを。実ふまらざる人は。必得ふく者て身をいのまる事多かるべし。什事浅きを仮と思ひ深き道理なり能く考へ見るべしとなりあるわど天下の主とふつても。飯をたべすまていは樂こもふし。命もつふぎがたし。名将を以て名城を格強り軍卒百万なり共。兵粮ふき時は忽ちに亡ぶと。いふ事は孫吳が秘書ふ見へたり。兵粮半時ふそき時は軍卒役を立かたし。是を以て兵粮をつくるを役人は至て大事ふりとは漢書ふ見へたり然らば世の大事外ふふし。何事も先飯をたべるを者ていは用は調ひがたし。切ふ立がたし。是わど大切ふ先飯の用意もせずを者て。うかうと居ていたらんこそ

ふ長し。益ふき事を我し。悪事ふをひ捨る様いのまりを善ふしの善智といふべし。又倫力もなくふ世界の為ふもふる事を我し。飢饉の時ふは貧民ふもをくいたものふり是人の上ふ立者は此ふかけ者一也。民の父母といふ事は民の為ふふり。民の益なる事をする者也。此事をよく心得て慈悲善根を行ふべし。万民の上ふ居て父母の行ひふきは天の罪人ふるべし。よく考へ見るべし。善を行ひて世界の人よりをせうまをしても一生。悪を行ひて世界の人ふ恨まれきらうまをしても一生。ふくふを善をふして世界の人よりをせうまをして。和合を者てくらすべど。安心福徳いのるべかるべし。此事を深く思ひ。よく考へて

若をゐしてらくらくとべし

○又大方の人がでい稲いふもべき事をざりとあて早く仕まち
て拙びたがる。是のとりふ心ろあきがくし。扨い事拙強く横根
つよくせ稲む成れしがくし。ふるふ仕事いろくくふせず
あて。傳飯い甚的くよ急度たべる。甚間ふも隨分とたべる。ふを
たつとめ働く事いゐまけて。味くとのむす。又立たる棒を横く
もりくさぬ生度者なり。飯い沢山よゐき善ゐり。身上い六ケ
敷善ゐり。誰もつとめ働く事いきくいゐり。扨んで居る事い
誰もすき也。ふとた丈ふてい。相濟不申一生い遠りがくし。仕
舞よい家を矢ひ乞食とゐりて。大ゐんぎするゐり。甚大ゐん

ぎ乞者ゐ。若き時ゐうりつとめ働て。老後の用意するゐり。
是を遠き者ゐりゐる賢人といふ。是を終りをよくする智者と
いふ也。一切福德いつとめ働くくゐりとき出る事也。衣食
住の三つも家業を使ふも。何もかもつとめ働くくより湧出る
事也。ふるふ仕事の出来ぬ事を安くしも苦ふせず。唯くふ
事をうり考て居る人ゐり。何といふ心ろあきがくし。世
も仕事いいやゐふ丈を世話也。たべる事ゐ出来がたし。
世の中がくろ世ぬゐり。是を考ふ者いかでもかでも精出て
仕事を世話をゐくぬ者也。甚勤定ゐしふ拙んで居て
くふ事でかりくいたがるゐつまらぬ者也。又金銀を求ふ事

い方にて居るなり。ふける事は少しも有るまで。始終は貪
欲する筈なり。大三十日の辻つまはあるとぬ筈也。飯米小遣ふ
こまる筈なり。人用は多く有て。のよけは至てもくるし。金銀
の差ひ道はこしらへるけるなり。金銀をもふける事は少しも
考へぬ身は六分五ぬ筈なり。社く考へ。人へ貸すは家業を衰
廃出精有て。金銀の出来る事うふ段すべし。飯米小遣の沢山
はいるうもべし。ふける事は沢山はふけて。人用はすく
ないやうふすべし。右様はながけても人用は多くるべし。家業
はすくるべくある者也。いろんや家業はろくふせず志て。入
用をかり多くする者は。身上はたまらぬ筈なり。人へ入道と出

る道とをふに合せて。其ゆどくを世をくすべし。ふるふ其心得
あき人をかりみて。大ひとまる事也。世間のまくる者ども
は道理をよく方にて。家業を出精すべし
○又親ふかくり。主人の飯を食ふ内は。飯米は米びけから
ときに出るやうふ思ひ。小をひは巾着かくふ出るやうふ思ふて居
とは。正銭我身上とおもひて。人へとは。飯米小をひの出所
ふし。米びけをたくひて。足ても。一粒も出ぬ巾着をふりて
足ても一銭も出ぬ。大ごまりあり。金銀はいつでもたんすの
引出しふはるとそひ。米はいつでも米屋からおて来ると思ふて居
とは。たんすの引出しふも金銀はあり。米屋から米もこと

さぬかゝ去てサア大ごまり。是ゼひ飢たるゝてゐらぬ飯米ゐり。
一日ゐくても。座ゐ人命よかゝる妻子けんぞくが。倡命ゝ乏ふ。
大事のくの飯米ゐり。生大事の飯米小きひの用意も
ゐくて俳べきや義りたし。是程の大事を拾ゐゞゝ家業
ゐまりけてせず。毎日おんで居てうまい物をくいたがりよい
物を呑とがり業ゐ小ゐへ。いつて色ぐるい酒宴拵ゐ
日をくゝ。おごりゐ長ゐて人をゐゐどり。己をだかり利
根ゐやうゐ出ひきゝと風をするゐ大ひゐるうつけ者ゐり。
今ゐ乞食とゐゝん事願ひゐゝ。智ゐる者ゐゝゐん是
ゞ。発止ゐ万ゐり。ゐるゐ丈を利根ゐりと思よて居るゐ。大

臭毛ゐり。世界中の拾業者也。此事をよくゐりて是より
いゐを改め家業を出精致し。倹約をちり。所をよく脩め家
を齊へ飯米小きひの。沢山ゐるゐうよすべし。若し道理を無へ
ずゐて。生皮被蕩せゞ貪る神へ引ゐゝ。常飢饉常
ゐんぎの乞食とゐゝ。野原ゐおきゐゝ。人間仲ゐを。
ひりもゞゝ。畜生仲間へ入置べゝ。夫ゐてもよろゝきや。
あゝきや。返答うけたまはりたゝサアく早くく。
何卒身を慎て家業を出精ゐて。朱びつよいつも朱のゐ。
ゐゝゐ致し。中着ゐゐいつもゐをひのゐるゐうゐすべゝいづき
小家のいひ事ハ。飯米小きひのゐひより起る。裏借屋

の夫婦げんろうに多くい栄びいのがつきよりおこると云
るべし。又大家の栄ひ色こなのもども多くハ主人の不仕合
よう起る事あり。是も身上が悪く不如意ふるゆゑ大禍
ひとあるあり。是よりていづれの道ふも身上をよくする
ようふすべし。身上をよくする所ハ禍ひも少なし。是身ふ
も仏よも慎こなる方也。いづれの道ふも。飯米小をひのなる
ようふすべし。飯米小をひさ〳〵なのもだ。あまりいひ事小言
ハあきはあり。こまふりて飯米小をひハ無度なるゆう
ふすべし。無度なるゆうよするふハ無度仏を用ゆべし。大
事の中の一大事也。一切のあんぎ苦労もつまる所ハ仏事を

よくせんゆゑあり。外よ子細あり。飯米小をひハもつでもなる
と思ふハ大間違ひ。唯なる事を云ひて。なるゆゑんをしらずを
ふるりて不覺を有る事多し。なるゆゑんといふハ身をよ
く治め。家業を出精する事也

○昔し阿難尊者　釋尊ふ申し上るゆうハ。業ハ浄飯
大王の家ふたん生して樹下よ座する事。ろくじうふ六年あり。
云かふして道をさとり。佛とあり。若かくのごとく
あらで。佛とある事ハ易きよりすやといへ。釋尊阿
難ふ告ておらく。昔し福祐の長者なり。備くの孫戒宝抱悉
く具りて何一と云て。不足あり。唯正赤色の真珠のごと

是を不足ふるひ求めんが為に人を將て大海ふかもむき。險
阻を去のぎ。かんなんを經て。寶の渚さに到り。身を刺て。血
を出し。油の囊ふいまして。海底に沈む。珠を貯めるたまぐり。
血の匂ひをかいで。集り来りて。そいくろふ鼎ち囊を
引拳て。たまぐりの甲を割て正赤色の眞珠を有。かくの
ごとくする事。三年を經て余程の眞珠を得たり。彼の同
伴忽ち莫念をおこして長者を井の中へ推落て。眞珠をう
ばひ取て。逃さりたり。甚時ふ長者。方便をかりて。井を出
て本国へかへり彼同伴をたづね出し。正赤色の眞珠を返かへ
し。ふくろよりまして。寶珠を納むるふくろして。二人の小兒を

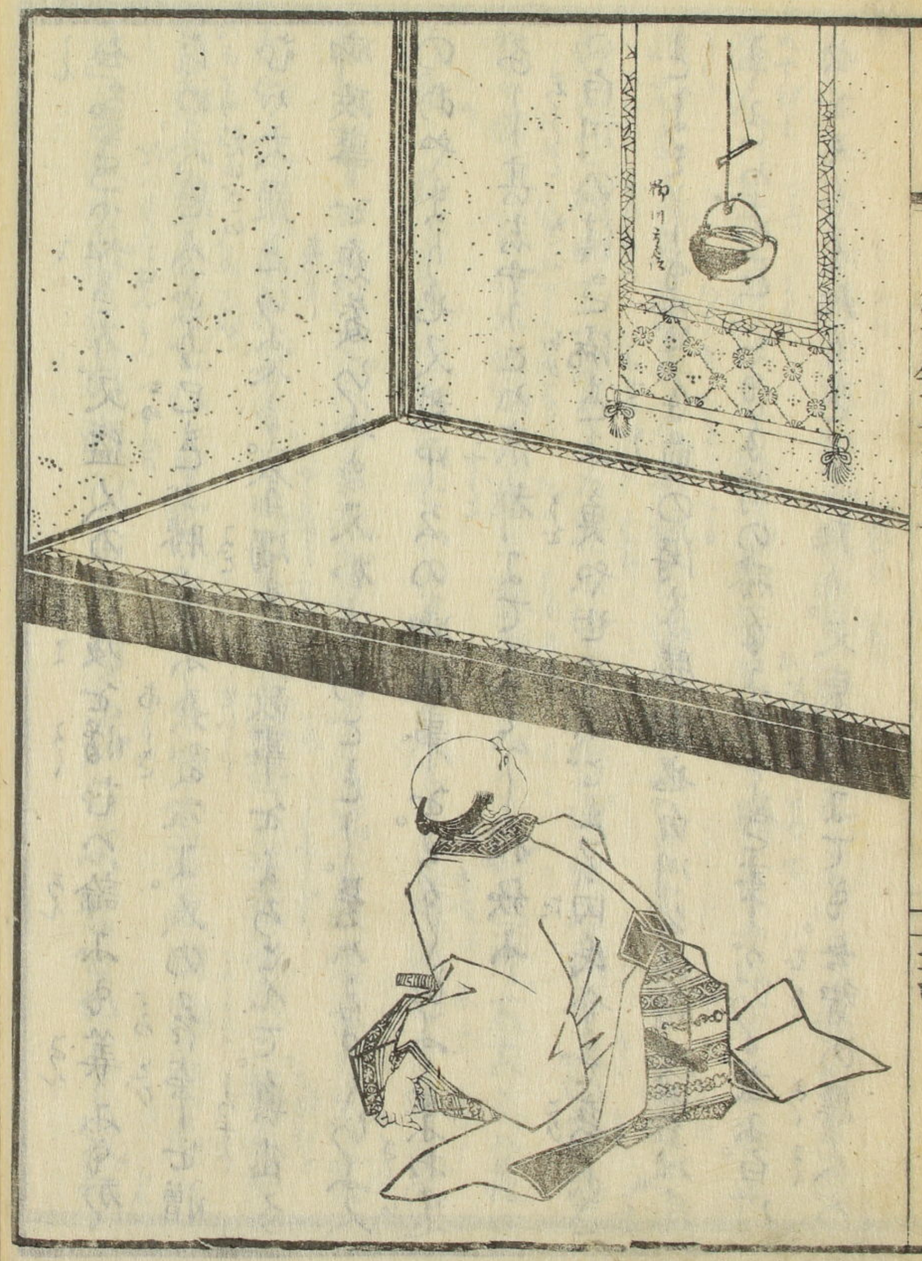
養育し。恩愛のなまりふ。其眞珠を出して。是をもち
なをびをす。ある時父の長者。向ていはく。赤眞珠ハ何を
の所より出るやといへば。一兒のいはくかめの中より出
たりといふ。一兒のいはくかめの中より出たりといふ父聞
て大ひふ笑ふ。母を笑ふ故を問へば父答へていはく。吾あ
まのかんなんを經て。漸くに眞珠を取得たり。其かん
くを經し事を。委細ふ物語りをきべ。母ハ大ひふおどろ
きしとあり。ふるふ小兒ハ其本末をきゝもぢ去て。唯かめの
中。ふくろの中より出たりと云へり。故ふ笑ふといへり。今
も又あり。阿難ハ只如来の成佛のそを見て。教勅の難行

苦行ありし事とむかうず。是を以て容易き事と思
り。実ふ如来とあるゆゑんをわらざるありとなり。今飯采
ハ米びつかゝ出るやうふ思ひ。小きひハ中ゑゝ出ると思ふ
人も。又かゝのごとし。中〻容易の事ふならずば事を
深くゑ用て。初年ゝり。身を治め家業を出精ゑて。飯采小
をひかいつでもなるやうふすべし是が一切禮義忠孝の本
源ふり。且又人命ふもかゝる事ふもた。大事の中の一大事
ふり。如とゝゝやかましいとゑるべし。そもとも諸君子
の言ゝ簡決第
誠ふ樂翁君ハ越中ゑの上下の人情をよく存知ふて貴

賤貧福は偏の居ふなりとハ間違ひのふき事也其上真
直ふ政事ふて上下共ふ世を安穏ふ送りし也樂翁福
の如うふる人をうりあるゝ世間ふいひ事ハなるべかゝず。
国家ふよく治まりて万民愁ひふし。亦也又たまゝふハ
越中ゑの政事ふたのしくいふ人あり。是ハ法をやぶる
悪人共ハ正道ふる政事を憎む者ふり。夫れふ昔しゝゝり
詩ふも作り。歌ふもよむ人多し。仲敬宗が詩ふいはく。春
雨膏の如きも行人ハ甚泥濘を悪む。秋月光を揚るも盗人ハ
真照の濫らんがるを憎むとあり。此ふハ春雨ハ田畑をうるを
作物草木の為ふよいよけれ共旅行往来の人ハ道がるるく

なる故に。春雨を悪む又秋の月のさへたるハよき物なれど盗人ハ是を憎む者なり。是皆己れが勝手にあしき故に憎むなり。又憂喜人に依といふ歌に○ますら男が小田かへすとて待雨を大宮人ハ花にいとふらんと此歌の心も上の詩の心に同じ百姓ハ田畑の為よ春雨をほしがれた。大宮人ハ花の為にわろしきとて是をいとふ。皆人々手前の勝手のよき事をおもひて人のなんぎを少しもおもはぬ者なり。不実といふべし。されども百姓の春雨を好むハ正道にして旅人や大宮人の春雨をいとふハ私しといふ者也田畑の為にさへなれバ。万民の喜びなり。あながちに是をいとふハ仁

なきに似たり。又盗人の月夜を憎むハ論にも筭にもかゝらぬ。大悪人なり己れが勝手に悪しき故よ人の善事を憎むハ大罪といふべし。今濁れる政事をよろこんで真直なる御政事を悪しくいふも又かくのごとし。是ハよろしくいふ人のあやまり也。又哉中公の御政事をよろしくいふとは相違なし。甚志かりこれハ京都までよミし狂歌に○白川の清き流れに魚やせて。にごれる田氏今ぞ恋しきとよミしも皆手前の得手勝手也。白川公の御政事ハ清しとハ志れども手前の勝手にあしき事がある故に白川公をうらミたりとミへたり。又東都までも無智の悪人ハ



什禍の尾日より三度やゝて
民安全也やうぶる時ハ
民ゝるまむかきうるる時ハ
家をやろぶす貴殘
貪福什禍の尾よあり
と時かうまゆくの所

そしりたるよ和遠ゐし。甚おもうこふハ

○落穂雑談一言集ハ曰。松平越中守殿御補佐の昆学文武藝の法世話強き方拡欲ハ。世の中ハ敗ハどうるさきものハゐし。昼夜文武とハふて世めらると。此世話づつよいとてゐるくいよハ大ひゐるあやまりゐり。いかんとゐまた文武二道ハ達せずんを。よい士ひとハいひがとし。是ハ君子の道ハ去て。よい気ハ知ら祐むるあらぬ事也然るハ出精もち人ゐし。是ハ依て止事を得ず法世ハをやきゐふゐり。是を悪くゐ思人と知るべし

又

[redacted]

所殿侍老中の民法政道邪まゐぐうハ又よきゐ者もハり。越中守殿ハ法政勢生亜ハて又ゐんぎの者ゐてあるよし。拡欲ハ。まがりても。扶子ハ物をとくふゐり。亜ゐゐうでもつぶす招こぎと。真亜ハもるハ天の道ハ去て清浄の善道ゐり拡るを。生亜を悪くゐふ人ハ横道者也いづも善人を助くまた。悪人のゐんぎするハハたりまゐり。天下國家を治むるハハ。善人を助けて。悪人を罰するハ政事の法定法也。政ハ正ゐりとハふて正義道を行ふ事ゐり。ゐらバ。政の字の訳もあらぬ人のハふ事也。悪政を悦ぶ人ハ。悪人ゐり。善政を悦ぶ人ハ。善人ゐり。ゐるハ真亜ハて。ゐるいとハふ人ハ。いづも悪人とゐるべし。

悪人たちの誹りハ。少もきにかける事なかれ。唯正道を行
ふべし
○又兜軍記琴責のもぢりに。のどのこぶえよくしと云へ
ども。是をきくがうまいなん。供のかち多しといへども。
ひとまを出さバかなしきなん。民を労する事此理にひと
しきことバかさなる。こんきうに猶も非道ハいやましの。み
なうをくらき白川御所當時米屋の責米にあるとがひきな
の上納始まりて地主の笑難大ひにまして金けれバ民に与たへ
なん町人の商ひなくきちんもさがらぬ米相場きりてんの
あるしとさてやさけると。ふくらハ東都の人の中にも戯中に

を眼ふそしりたるに相違なし。是れそしる者のあやまり
なり。無智の悪人といふべし
誠に戯中候ハ人のあらぬ所へよく機の身を侍方なりと生ま
も。侍斉もよくまして貴賤上下の人情附近もよくあり
あるにハ古今に稀る変大智者なるべし。御政事の大事ハ下
の邪正をよくあるにありとハ古語にえへたり。是によりて
万民の人情邪正をよくあらしめて善悪をさだか糺た甚理に
背く事なり。いづきよまても万民の邪正をよくあらしめて天
下國家を治むべし。甚天下國家をよく治むるにハ先我家を
よく治めて。甚後万民を治むべし。我身だも治むる事ならさ

ゐずまして天下國家を治むる事いろんや又貴賤上下の
邪正をよく糺して。おごりを取ひしぎ。倹約をもとゝして
ゆか福ゝ。万民の安心ハあきとゝるべし。夫れ武中久いな
ごりハきついおきてゝいあり。倹約を第一とゝして。伊かゝ伊近
も。手機をつけさせゝるまして。天下國家の安泰をたかりあゝあ
りがたき事。ゝ上あゝ皆く敬ひ奉るべし。おかしいのまり世世
話が届きまして。ゝくいゝまとゝ事ゝ事ゝ事ゝ日本国中一隨分
と倹約をせよ。くいゝ口をへらせ。憤奥を六尺よりするハ費ゝ。
三尺ゝおして。二節よせよ。二尺よ切て三節よせよと。あまり世世
話が届きまゝとゝ事ゝふんどしの名を武中ふんどしと名たり。

世丈名称をふんどしの名よゝとゝひもいさゝぶどゝ事せよ。
六尺の木綿を一度ゝついやを事ゝ事ゝ事ゝ二色ゝ三色ん
ゝゝくせよと。作せ出さまた布よつましいきとゝるい
事ゝゝ。皆武中称よかぶせて右ま内さ。あまり手氣が
つきまゝとゝ事ゝ。色くゝ。あんだいをかぶせる。あまりこまか
ゝせゝやくべゝゝず。右かしゝあぐゝ武中久が世話やきまゝ
すハ。六尺のふんどしが大方今ハいを丈武尺たゝりませう。
又今の女ハ色りゝを着物のすそと同しゝ様よまる是
又伊とゝいゝ事ゝ右まがとし。武中久の世世話やきゝゝ事ゝ
世話ゝ万也又武中ふんどしとらゝいよろしかゝず。是ゝ

ハ二尺のふんどしゝ。三尺のふんどしゝとゝふべし。是も大きふ
ゝ世話がをぎる

戦中ふんどしゝとゝふハ。元細川氏の手勢合ともゝふ能
襞束を作るゝ大きふよろしゝとの事ゝあり。いづれが本
とゝふを知らず

戦中ゝハ倹約を主としゝ所でハけんやくを旨をさゝ。又つゝ
ゝ弘ゝをるゝらぬ所ゝよてハ。ふしげふく者ひゝふ大智者也。其
右ゝ事ゝハ天明八申の二月朝日二日。京都大火ゝあり其時
禁裏ゝ御炎上拾ゝさせらゝたり。ゝよりて大内裏
建立ゝあるべき由 天子様ゝより作世出さゝたり。ゝ大内裏

の儀ハ至てゝ重事也。三十六の宮殿ふ。七十二の御門等
を建る事ふゝ。中くゝ莫大の費物入ふり容易の事
ふゝあらぬ。ゝよりて戦中ゝ歩上京ゝつて時の関白
左大臣鷲司ゝと申ゝ相談ゝあり。大内裏建立ふハ伐木
を多くゝ要ふ事ゝ。中くゝ十年や二十年ふハ成就ゝ難
しゝ。ゝよりて先ゝ御殿御造営也。戦中ゝ申ゝ迄
留中色くゝ倹約の申渡ゝ拾ゝさゝ。ゝ有ふ。ふふき愚人
たハ。戦中ゝ主。大きゝ眼をたる事ゝあり。又田沼侯ハ当時愚
人たのよろこぶ事ゝふ。御政事をふさゝたる有ふ。後まゝ
り笑ゝ。よろ者ふ事ゝふ。又戦中ゝハ未のよいゝ

ふと思召て。京の者の至る通りふハふさぎぬ有よ。大ひふ
恨をたるやうすふりこゝをふよりて。越中候ふ越度もの
らゞ其分ふさゝふかぬと。ふゝをを祈ろふ人くもなり。夫
有ふ狂歌ふも○白川の清きふぎふ奥や世て濁る田沼
今ぞこひしきと。よゝたる者也。実ハ京都も皆おごりふ長
ゞて。花美ふる有よ。越中候ハ倹約をふさきたる者ふり。実
ふ京都をよくせんと思召ての事也。ふるよふ前のおごり
ハいろゞ去て。越中がわまりけんやくの政事を去ゝ有ふ。
金廻りがるゝて。武方をふんぎさせると。根をふくん
でえたりふるよ文政十亥の春

御任官の御事あらせたり。是ふ依て此
御名代と去て酒井左衛門尉様松平越中守様侍二方ゆ
侍上洛ふり武時楽為様侍子息越中守様ふ作せらる
やうハ。其ゝ先年京都ふ於て。倹約の政事を致したり。
是京の者の為ふり ふるふおごりを好む者たハ。武楽為
を憎ゝ居る者ゆり。甚子の事ふをゞ。何やうの孤孝を
興ゝんも去をがゝゝ。武雑を遵ふゝふハ。全根を除斗ふ
考ふべゝ。是迄の御名代よりも沢山よ考ふべゝ。一ゝ度でよ
い所ゝも。二ゝ度も考ひ。二ゝ度でよい所ゝハ。三ゝ度も考ふべ
ゝ。たゞす迄ゞ役義も首尾能つとまるべゝ。其用意よて全

根を沢山に持系すべしと。指南の川て。則ち序上京る
さきけるに子息越中守様に指南の通り三度てよい所
へも五両もきひ。五両てよい所へも七度も拾度もきひ
けさで。御名代の御役ハ首尾好相済申ル。其時京の者
牡欲ふ。奥州で越中ふんどし去めあげて京名代よ全
をふりだすとよろしとふり京都ハ流石歌所よて牡欲
も上ふふくふむふり。是ハよく遊をさきと。始末とる
所よてハ始末を拵をさき。又きふてよい所よてハふしげ
ふくきひ事ふ大智者ふり。又楽翁様をけんやくをき
と思ふハ大百違ふり。けんやくをきふいろずけんやくせ

孫を世の中が安心ふくらせぬ様也。楽翁様もおごりハ
性好ふきた。夫でハ後ふハ大災ひ大難儀とふる様ふ正
事を得ず去てけんやくをこのをふ外よ子細ふし
誰でもおごりのきらいふ者ハ一人もふし。皆大好ふり
おごきを正用をふ去てを持もよし又見て今をもよい。
けんやくをきをきとふく見へて。を持も悪い。ふきた
おごきを引赤大難儀とふる。此様ふ誠の智者ハおごる
事をせざるふり。既よ論語ふ子曰奢るときハ不孫也。
倹ふる時ハ則ち固し。其不孫ふらんよりハ寧ろ固し
と此ふハ不孫とおごりて天地人に礼禮せんよりハおご

らぜ去て固い方ゞ安心ふ去て。福德を得るといふ幸也。
是よき去ゆうこゝろ。愚者ハ前後の考へもふしふ。ふ
ごるけ迷ゝ。智者ハ前後の損益を去ゆて。おごりハせぬ
ふり芸を遠さかるんとかりのゆる賢人といふ。樂義様
ハけんやくぞきよゆうず。けんやくせ様ぞハせゞ安心
ふらうせぬ方ふり。丈方ふ法も前よりもけんやく遊
ぞさま。又万民よりもけんやくを教へふ。是安心ふく
らさせんとの思ひ召也ふるふるくらふ人ハ大六天の
魔王也恐まずんべゆるべうらぞ。けんやく貧素ハ君子
の道ふり。芸い樂義様ぞかりふあらず恐ふぐら

様　様水戸黄門様　様を始め奉り其
外の賢君方も皆倹約貧素を好ミふふ。ありがたき
事也。是ハ日本ぞかりふゆらず。天竺唐土の聖人方も
皆けんやくを去つそを好ミふふ
○梧窓漫筆ふ天下國家の治乱ハ奢りと倹との二字
ふゆり先祖ハ倹素ふ去て興ハりゆひ。子孫ハ奢りて滅亡
す。漢唐宋明ハ勿論。甚除の代々方も皆然り治乱の大
体ハ千歳一徹ふるべーとゆり。是ふ向遠ひふ。昔しの
聖人大王方ハ少しもおごりあふ事ふ。堯舜の二王
ハ茅茨ふ剪採ふ劉とゆり。ぱゆハ堯舜の二聖人ハ。

四百除州の大王ゐまゝませ共。盃木のえゐむけづくすが
やぶきの先をきゝゐど。又苦義作ゐて置ゐ共ゐて
其外のけんやくハ思ひ去るべし
○論語ゐ子曰禹ハ吾間然すること無。飲食を薄く去て
孝を鬼神ゐ致し衣服を惡去て美を黻冕ゐ致し。宮
室を卑去て力を溝洫ゐ盡す禹ハ吾間然すること無
と。此ハ間然とハ物のすきまゐくゝ去り所ゐきを
いふ。禹王の徳の全きをいふゐり。間然する事ゐき内
ゐ分ても。三事をのげて其大がいを去わす。常の飲食
ハ薄くのゐくゐ去て父母の孝養鬼神の祭祀ゐハ
力を尽くゝ物をいまていさぎよくゝしゐゐ。又常の衣服ハ
黻冕ゐる物を召て。宗廟御先祖の御法事ゐハかんむ
り。衣服等ハ極上の美麗を用ひゐゐ。又常の宮室ハ住
居ハいや去くゝ去て力を田地の溝洫ゐ尽くしゐゐ。ひでりの
時ハ水を引用ゐゐゐゐ。又大雨の時ゐハ悪水を落す用
ゐを遊バさゝ水損日損の災ひゐく五穀の沢山ゐ取ゝ
て。民百姓のゐんぎせぬやうゐ去ゐゐ。凡を常人ハ衣食
住の三ツゐ義を尽す事最も切ゐり。ゐるゐ禹王ハ衣食
住の三ツハ至て簡素ゐ去て。少しもおごりゐゐ事ゐし
天下の至る福徳を我為ゐ去ゐゐ事ゐし。皆万民の為ゐ

おもへばありがたき事也。禹は吾間然する事なしと。ふたゝびのおもへは。深くわめおもへ。言葉あり。昔しの聖人天子方かやうに倹素を守りおもへは。財宝のついえを惜こゝろおもふにあらず。唯天地の間に生出て。上下の品はなけれども。同く是同胞の人なり。ふるふ同胞の兄弟ふ衣食住に困窮させて。我獨り何の功徳なれて衣服家宅をかざり。美食をせんやとなり。道理を考へて天の冥鑒を恐て衣食住を倹ふ。是世界の万民ふんぎをさせて。我ひとり楽をまんやとなり。此徳を積の本也。養生の術也。子孫長久の基ひとり一切の智人ことを考へ

空しくおごりを枝すべからす

書經ふいはく。文王は卑服をして。民ふ幸ひを供へおもへとなり。又后き方はかいこをかいきぬをかり。君の衣服を調へて世のいとふをふしやふ。ふるふ平人のつまと者て糸を取をこなる事もあらずはまれさ。縫事も出来ぬは。あまり不調法無益の女とおもへべし。日本唐土の大聖人方。皆倹約質素を守りおもへ況や其外の愚人凡夫。分不相奢のおごりをするや不届とおもへべし。佛神聖人方ふ。おごりとおもへは少しもふし。唯愚智の小人斗りおごりを好む。是ぶすふ。ちち愚智の音板ふり聖賢事

ふり給度はなを〳〵ゟ先祖ハ儉約質素ふゑて家をおこしゝひゝ子孫ハおごりて國家を失ふとゆるゝ遠ひのふきこと也左傳桓公二年ふ清廟茅屋越席粢糞糞其儉を昭かにするとゆゝり此ゟハ清廟とハ先祖方のおたまやふり。支さ〳〵もかやぶきふて越席を敷き粢糞とて供糞ハ糞〳〵あらゝげたるぢかりふり。是ハ先祖方もかくのごとくふをぢ。子孫たる者。けん弁くを尊ぶと云て。奢侈をふるゝ〳〵ゟ教〳〵ふり。是を其儉を昭かふすとゆゝ也ゆりがゝき事ふり。子孫たる者。先祖の家風を変度ちるべゝ。是ハ唐土の先祖ゝとぢかりふあらゝず。日本の御先祖

天照皇大神宮も又かくのごとし。神代の昔〳〵より。地祇も垂ず事ふく。山の庁さがりふりふ宮ゆり去てや孫もゝらぶきふり。是ハ日本中の子孫よ。おごるふとゆふ教〳〵ふり。是ハ倭姫ふ御詞宣ゆゆて。ゝらぶきふ殺す事也神主先の私ふゆゝらず。天照大神の思召ふり。こゝを歌よよゝ〳〵人あり。身のそどを去まと教〳〵し伊勢の神今ふゝらやのえよゝ〳〵ます。とよゝしゝ間遠ふし。日本第一の御神御先祖の事ふゝを柱も美金家根も美金。伊のもかも美金ふてとゝらくてよかるべゝ。ふふ

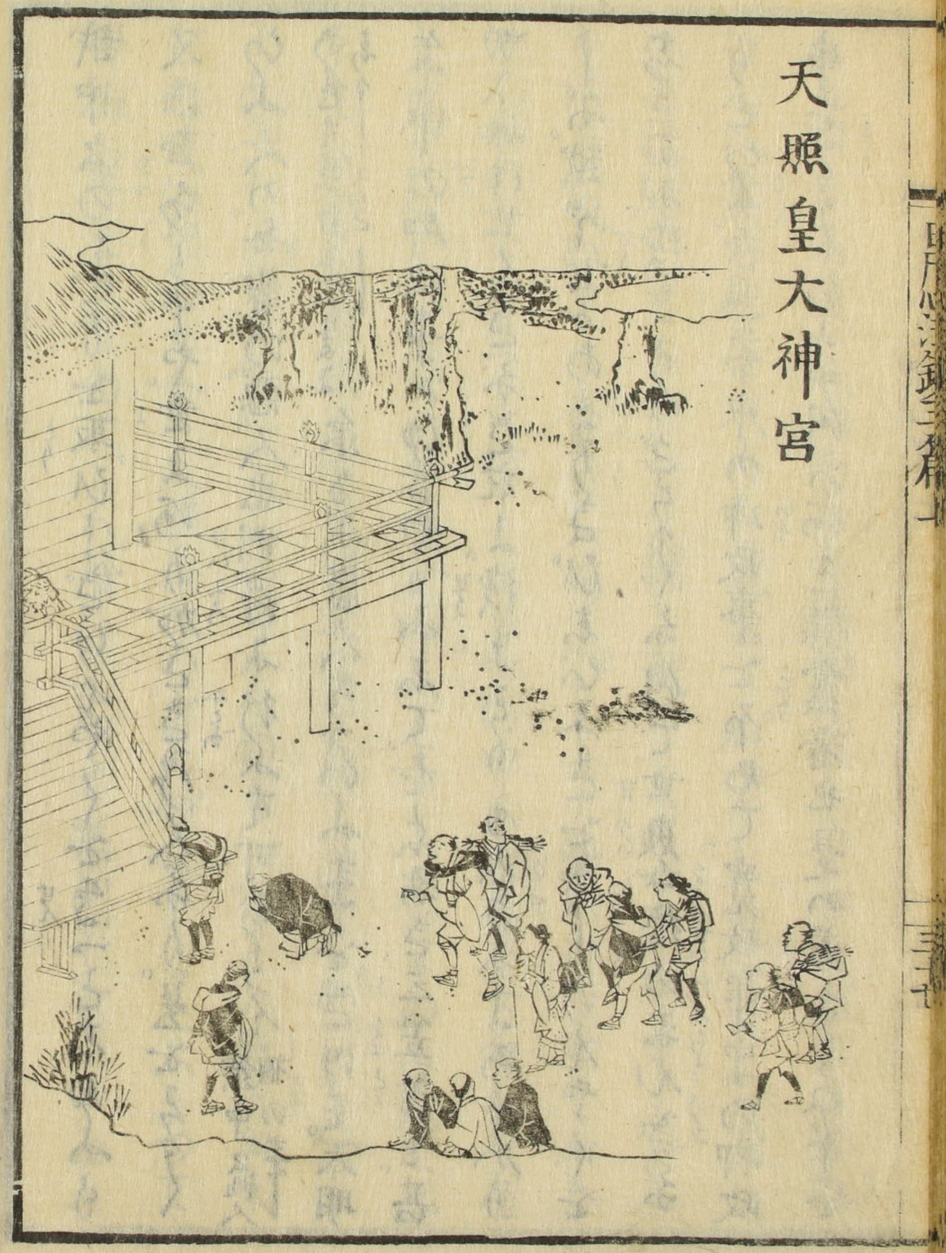
ちらぶきの宮ゑ御座ことハ倹約質素の道を諸人ゑ示
めさんとのゝ一石ふり。誠ゑ付上もふき。ひりがとき事
ふり。諸人ゑ貪之ゑんざを させまいゐるのゝ一切
の人民ハ教へを表度ちり奉るべし。此教へとする人ハ
福徳ハ預ゑず来て来るべし又毎日の御供米ハ唯三村
ついたる黒米ゑ生活の御菓ふり。是ゑて少しもおご
りゑゑね事をよくゐるべし。今時のうゝ店の者ゐかゆうゑ又
ふゐのぞや吾智のない虫共。おごりゑ長ゞ榮曜榮花を好
むハ。身の程をちらぬ。大悪人貪之ゑんざすん善ふりさハ
と慎むべし。日本の御先祖　天照皇大神宮様唐土の御先

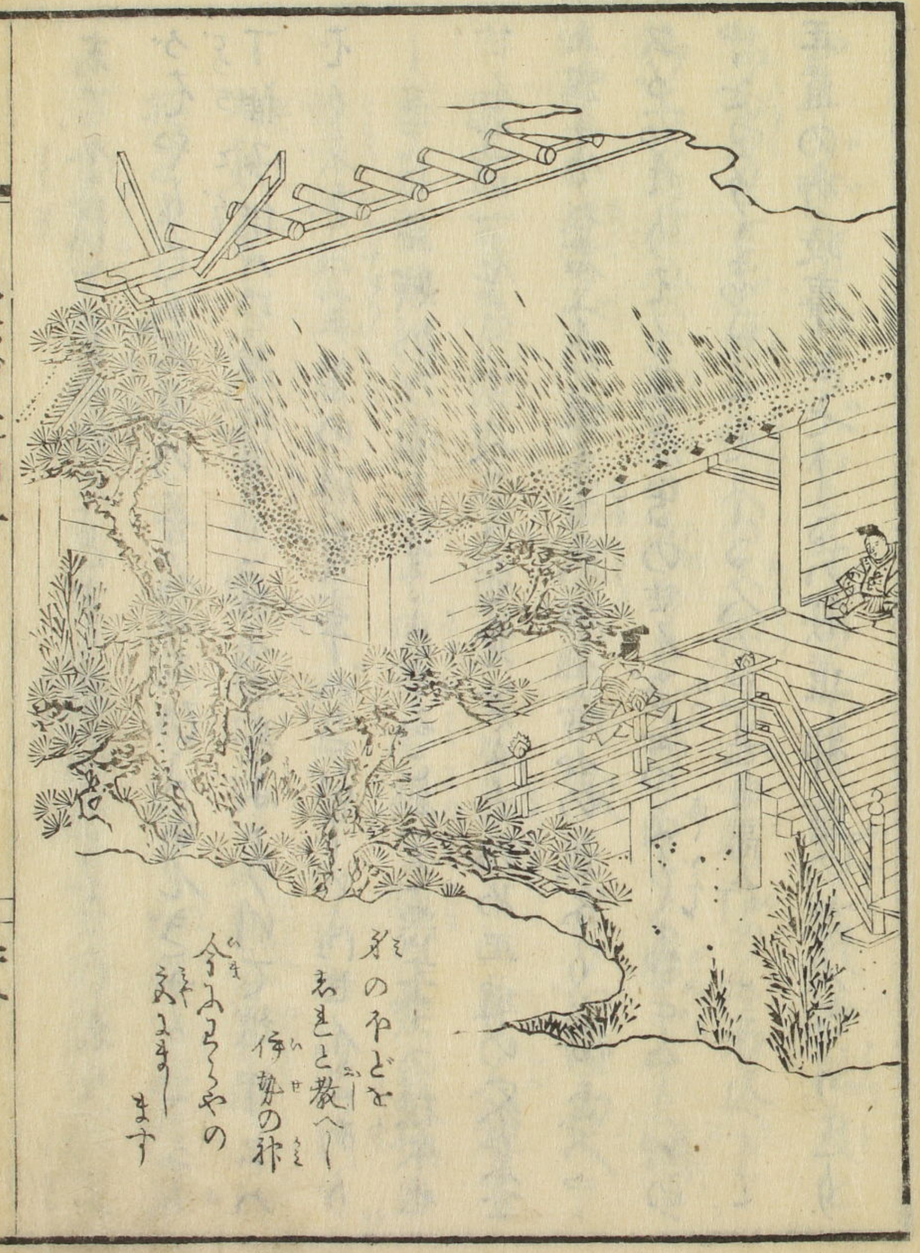
祖方も。皆子孫ゑけんやくをさせて。天地自然の清浄ふる
福徳をうけさせんとの教へふり。ひりがときたまものふり。
子孫たる者ひつ者ておごるべうらず。若おごるを仏神聖人
ゑ捨へて天地の間ゑ身の置所あるべうらず。是ゑよつ
ておごり不身持。不精ふきをうふすべし。おごりの一事ハ
大悪の根本ふり。乞食とふる下地ふり。此事をよくちら
ばたとひ何ぞうの事ありた。おごる者ハふき者ふり。ふる
ふおごるをハ。吾智の大悪人也。畜生よりハおとりとゑ
るべし。ふ。貪ちくて。花ゑいこのゆる人ハ只ひんをこの
める人とちるべし。貪ちくて。有徳ふ人の真似するハ。孫貪ふ

ふる相とあるべし。けだし首の欲をよくあるべし。おごりを好む人は。貪を好む人はわれ遠ざかるしかるゆえの道理なり。越中ゑ
はさけいたきらいあり誠よ越中ゑの中うあるゆえ人だろ
りのうたあまり貪苦はのるべうず皆おごりをしぶき
けんやくを第一とせしゆえ世の中は富貴安泰ある歟
しまえ引うて皆の者たぐ向ふえずよおごるかうえて上
下たふ貪を雑俗千万也けだし道理を能く考へて。おごらぬ中う
よをべし。若向ふえずよおごる人あらば。のとの姫未出来
ぞ有て。いやとも貪を雑俗はのがたがたしことをふよつて
佛神聖人有智の人くは皆げんやくを本にそなりあ

越中ゑのおごりを取ひしぎけんやくを第一とあるもの
又は知ふらずや世よのりかたきゆゑ人ふり是をうらく
のよ人は名智の悪人也刑罰ふ行ふ可あらん（越中ゑ人相の事）
あまた長けをいは是よ
ふるふ愚人たぐのよ事をきけど。天明
年中の御政事はゆるやうふ有て。ぐく名き三笠等も甚
やうふはせんぎふき有よ。後まうりも大きふよろしかり
しふ越中ゑがあまりさびをいふまを出し。けんやくを
あくこ有ふ後まうりぐうくふ用て世界一統のふんぎふ
りとのよ。天明年中の御政事を不わて。寛政年中の御政
事をうらくのよ用は何ま悪黨者也是は道ふらぬ事を

天照皇大神宮





名の和どを
ちまと教へし
伊勢の神
今みろくやの
えんまます

なて。金銭をうしなけんとする。悪人ふりだくゑき三笠ぶしやりてハ正道の善人ハ大ひよふんぎする事ふり。丁稚子供ハ皆悪徒者とあることをふりて戦中ゑハだくゑき三笠等の勝負事ハきびしくきせんぎあり一事也盗賊かたりも。是ようふことを。悪事一の根本也。せんぎせずんだにゐるべうらぞ身をよく治め正道の家業を出精すハ君子の道ふり。大福徳安心の道ふり。ゐる戦中ゑがのまりだくゑき等のせんぎをつよくあるとなの中をゐるくあることをしる人ハ。已をぶ悪行を出来ぬとて。正道の御政事をそしるハ横道邪智の悪人ふり。とり

ゐしーがずんだにゐるべかくずあんでも御上れ法度をよくまもりこまぞ世ふ位人の大切といふ事をよくまもるべし御上の法度ハ万民の為あるもだいりがくゐんじて慎ミうやまひ守るべき事肝要あり。ゆ俗をよくハ博学人國家をよく治めんと思ふ人ハ甚時くの賢人智者とお使ひのゆて拙るべし。酒井若狭守様ハ乗蒔様の所一打死ゐ武士載ばかさを。御政事一の法物語ゆゆて。大意意との法事也。乗蒔様ゐる時。机を三弗法也拭さを。作せくをけるせうハ是ハ拙者勤役中の机くゐるゐ甚許ゐ法ゆづり申ストー若狭守殿ゐトさをけるとゐり。

國家をよく治めんと思ふ人は賢人と相談ひして
然るべし。唯己れ一人の智恵のみをよしとして人の智恵を
かりざる人は。いまだよき智者とはいふべからず。以
事和論語等をえんたり

○抑高き家の御製とは。新選本朝廿四孝編ふ
曰仁徳天皇は人王十六代。應神天皇第四の御子也。
ふ。第五の皇子。深く御てうはいまして。
殆よ太子ふ立ひぬ。其翌年天皇百十歳よりて崩御
太ふ。のちよりつこの太。作せられける。仁徳天皇は
御兄の事ふ思ひ御位ふ辞ふと欲ふ。又仁徳天皇

父の御ゆいけんふ思ひ。ひらつこの太子国を治めふ
とて。たがひふ位を西ぬりふひて。辞退ふさ〳〵事三年
ふり。其内ふひらつこの太。かく思させふひけるとば。仁徳天皇
ハせんかたふく。御年廿四ふて御位ふつきふは父の
ふよそむかず。孝ふ位をゆづりふ事。大孝行といふべ
し。今の世ふいわりがときく人ふり。又民のまず者をえ
て。三年の貢物をゆるしふ。其後高き家よりのがりて
えんだ。民の家くふけむり立ぬよりの御製ふ
○高き家ふのぼりて見れば。民のかまども
ふぎさいよけりと遊ばさたり是も禍の有りよりおこる

事や。堯舜の世よりもおとるまじき。仁政と皆かんじける
津の国難波高津の宮よ位せ給ふ。在位八十七年癸の正月
廿六日百四十才にて崩御し給ふ。八幡大菩薩第四の御子
ぞ誠ふかりがとき。天皇也。民の父母とゝ云かゝる仁政
の御人ことゝ云ひ。又天智天皇の秋の田の御製を。
百人一首の巻頭よおくも。民をいたはるとゝ云事。
百人首のかうゝ云ゆくゝ見えつゝ。万民の上よ立人ゝ民を
いのるとゝ云むが云よくぶんふ。ふり。ふる民の物をむさぼり。
ふんぎをさせるゝ。天の罪人ぞと。
○文中宮祐畧解ふ云。天皇の御製ふと八雲立出雲八重垣

妻籠ふ八重垣造る其八重垣を。とは八雲とは八家のい
むりをゝふ立とは竈の旅つる形勢をゝふ出雲とは八云
のゝふては後絶ぬる所ふ出雲とかゝ孫たる者也次第ふ国
家ひらけて。榮つるをゝふ八重垣とは八家の垣をゝふ。妻籠
とは。人の道は男女の二ッより生ぜて。夫婦の道をふ。又
子君臣の礼義を立陰陽の理備りて男は耕ぜて外の
事をふ。女は紡績て内の事を備るの義を以て妻籠とゝ
ゝふ八重垣造るとは。始め一井の田を發くをゝふ。其八重
垣とゝふは其上よも八重垣を造り。又重上よも八重垣を造り。
殆ふ三十三里余りの一郡とゝふるを祝ゝ給ふ詞也

又八雲立とハ。高天原八家の里人竈ゑ飯を炊くけむりとす。下民繁昌をいふ。雲とハ地氣蒸昇りてたゑ引物也。けむりハ火氣の教するゑりけむりのゆりさま。雲ゑ似たるを比志て。雲といふ。耕田のひらけ重るゆりさまをいふ。天の八重雲といふも。天法ゑびこりたる深雲をいふ。八重雲を推分てといふも。此義ゑり。此序せいも万民のかまどの賑ひ榮ゆるを悅びゑ序歌ゑりとゆり。ゑ雲も渦の尾より出る本也。ゆゑ渦の尾をやかゝ志てハ半殘貧福ゑゑ。ゑゑ八出家がゝし。人命を持ハの根本ゑまた左もゆるべき善の事ゑり。是を篤と志らさう。

人ハ世の中の輕重損益歟味方を志らざる人ゑり云智のゆ上ゑし

昔しの聖王年貢を取ゑゑ十一の法ゆり。井田の法ゆり。十一の法といふハ十分一。年貢を取ゑゑ本也。井田の法といふハ。所上一年貢を九分一差上て八分ハ百姓ゑ取る本ゑり。ゆ八雲立の歌ハ井田の法をいふ也。一井といふハ甚田九百畝也。甚中の百畝を公田といふて。所上へ差上る所の田地也。ゆ因地を八人の百姓ゑ寄合て佃り。甚物成を皆所上へ差上るゑり。甚外の八百畝を私田といふて百姓ゑ下さる所の田地ゑり。甚田地を八人の百姓ゑ佃り取ゑ志て。妻子けん

ぞくを養ふふり。是ハ周の文王の法年貢を法取ふさまと所の定法也。以余ハ行ふふうらぞ。少しも出る事ふし

私田	私田	私田
私田	公田	私田
私田	私田	私田

中の一分ハ公田といふて御上へ差上る事の法田地ふり外の八分ハ私田といふて。八軒の百姓が作り取ふ志て妻子けんぞくを養ふ也。是を井田の法といふ。往昔の年貢の御定法也

唐土も當世ハ四公六民の税法ふて上下共ふ其所を得たり是聖人井田の良法と同じ事也といふ四公六民と云ふハ四分御上へ年貢ふ上納仕り六分ハ百姓ぶ法業ひ申ス事ふり今日本の制度も是ふ當るといふ人ひなり。

法ふ年貢の事ふ御政事の根源ふり法年貢を不ど取て御上も徧の屋をやいて悪徒者の詮儀を志て。下法を安養ふ家業を出精させ孫をふくね。又下ハ百姓ハ法年貢を不どふ納めて殘りをりて徧の屋をやき妻子けんぞくを養ひ田地を耕作せ給ふをあらぬ上下共ふ徧の屋の安心ふやけるをふ。御政事の第一とする所也。貴賤共ふ徧の屋が身分相應やけぞ志てハ安心ふくらしがたし。徧の屋が安心ふやけざるふ於てハ。とうぞくかとり。火付人殺し等の悪徒者ぶ多く出来て世を治めんと欲すといへども治る事ふし。

是ニ依て国年貢の取引ハ政事の本根也。万民が苦労ヲ
しヲ家業を出精して家来けんどくを責ようヲせ
孫をあらぬ。万民の竈よりけむりが立ずして天下泰平
國土安穩とハいひぐさし。夫れ高き家の御製も屋ゝより
出たり。貴賤貧福ハ禍の屋ゝよりとハ一切の本根を一口ヲ
て。あらせたるハ奇妙不思議の御詞ヲ作せをよく考
て人ゝ夫飯の沢山あるようヲをべし。国飯ガあくてハ仁
義禮智信も忠孝も出来ぬと云べし。禮ハいるヲ成て。
ヲさヲ敗をとハ間遠ヲし。能く立ヲ去て国飯のあるようヲ
ふをべし。一彩の家を相續するを烟を立るとハ。けむりが

立ぬようヲ。ヲを。家ハ新絶と云べし。烟り立の御せい
を。今の世までも貴義するハ何ハ思ハ。やハ一切人間の世を送
る本ヲるヲよりて。ハ事を篤と云ずヲ国飯の用
意をせぬうち云て越中ヲ。ぶ殘貧福ハ禍の屋ヲよりの
と。氣の毒ようひどくいましめヲ。言葉ヲり人て
ひりがゝ存して禍の屋ヲ。ハ安くヲけるようヲをべし。
○政事の肝要ハ智仁勇の三德ヲる奉行役人を云ること
万民を安ハヲ養ヲハ云むるヲあり。万民を責ヲヲハ食
を以て第一とす。食ぶ沢山ヲあく云てハ。教ハも禮義も備ひ
ぐさし。夫れ論語ヲも子衛ヲ適丹子僕たり。子曰庶ヲる

㊁ 万事くいるすみもの
のこぶまりさきつたり
祝儀不祝儀ともみ
くいのこをせずあてい
用心ぶかくしてい
ふゆしぶかくてい
むづかしいたり
おやのんぢも
のまいぢもふい
たぢこぶかくてさ
さうぞくしいたんや
せひともふ入用おもを
とふきひがあくてい礼儀
も出来ぬ

素人画

㊀ 銭中名作の通りみ
ぬ通ふし笑淺貧
殺ともみ湯の尾を
やうず去てい行るすも
出来ぬぐしゝ行るすみも
りの物い金淺ふり四仮と
小半ぶふいと世界いくらやぐ

㊂ こしらいおめしをいらくたべくも
直ふふうぐへるゝたをこと湯いず
こしのるのまずよりると直ふ沢
痛八百のくくいのきやをせらいぐ
ア又強ぐへ河ぐくく殺をつくを男

哉。冉有が曰既に庶なり。又何を加へん曰こゝを富さん既に富り又何を加へん。曰こゝを教へんとなり。此ハ孔子衛の國を通りるゝ時。冉有とらゝ弟子僕をして車の傍側ゝなり孔子衛の國の人民の多くなるを見ひて。衛の國ゝハ庶くの人民がなりてよき國なりとのゝたまへば。冉有が供の冉有がいゝ。庶くの人民なり是を如何を以て先とせんと向ひ奉るに。先租稅を薄くして民を富しゆたかにせんとのゝ。既に富たる時ハ又いかゞ為さん。孔子のゝたまへ。富たる上ハ民に仁義禮智信を教へん。人として教へずんハ

禽獸に同じ。此有に學文をさせて人の人たる道を教へんとなり。先富さ孫ハ教へも禮義もやどこしがたしとの事をなり。然ハ富さ孫ハ禮義ハなるゝ成てゝきにたいする事鉛ひなし

○孟子に曰く民水火ゝ非ざるに生活せず昏暮ゝ人の門を叩て水火を求るゝ與へざる者なし。至て豆豆なるなり。聖人天下を治むるに蔬粟有ること水火の如くなるに蔬粟水火の如くに有て。民焉ぞ不仁なる者有ん哉といへり。此ハ民の財宝を富ましむる事ハ仁政の本たる事を論ず民水火なければ一日も生活て居りがたし。水火の二ツハ万

民日用の急ふる物より甚だ大切ふる物ふまた。若人
ゆゑ川て日の暮より人の門を叩て水火を求むるより興ぶぞとふ
事ふし。こゝ至て沢山ふゆる有也。菽粟沢山よゆる事水火
のごとくふらゝ有むゝば。万民正道より去て。不仁ふる者ふし。
仁義ハ人々の本心ふりといへども。貧用足ざる時ハ士君子
といへども其本心を失ふ者多し。いらんや小人より於てを
やふらむ。従義ハ富より有て。ふきより貧すゝよりて。聖
人天下を治むるふ。先民の食を足ることふふり

日用心法鈔三編上終